

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名： 京都「御土居絵図」がいざなう地域の身近な
歴史探検

事業者名： 京都大学総合博物館

住所： 京都府京都市左京区吉田本町

TEL： 075-753-3272

FAX： 075-753-3277

HPアドレス： <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>



連携事業者名： 無

会場： 京都大学総合博物館・北野天満宮・北野中学校

事業期間： 平成21年7月31日～平成22年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

京都大学総合博物館は、大学に膨大に収蔵された標本を活用し、社会に還元する目的で設立された。この使命の下、国宝・重文を含む考古・日本史資料をはじめとして、約260万点の標本の維持・管理と研究、公開を行ってきた。その過程で、学術研究の成果の中から、標本資料の重要性やそこから読み取れる様々な興味深い情報を、市民に対してわかりやすく提示する手法を蓄積してきた。本事業は、総合博物館のこれらの活動経験とノウハウを活かし、市民向け、地域向けのすぐれた雛型を提示する意気込みをもって実施したものである。

2. 企画内容

①事業目的

京都大学の収蔵する京都の歴史的文化資源を市民にわかりやすく提供する。

②事業概要

京都大学総合博物館が所蔵する、豊臣秀吉が京都に築造した「御土居」の絵図(元禄15年成立)を素材として、常時市民・子どもたちに楽しんでもらえるよう、文化普及に重点を置いたパンフレットとデジタルコンテンツよりなるプログラムを作成する。具体的な事業は、以下のとおりである。

- ① デジタルコンテンツとパンフレットの制作
- ② パンフレットやデジタル画像を使った現地見学会や講演会
- ③ 「週末こども博物館（毎週土曜開催）」での展示解説
- ④ デジタルコンテンツの完成記念講演会及び展覧会
- ⑤ ②③について外部評価を導入し、適宜事業の改善をはかる。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

京都の御土居は、豊臣秀吉が築造させたもので、京都大学総合博物館は、元禄時代の御土居の全貌を描いた「御土居絵図」を収蔵している。御土居は、江戸時代を通じて、京都を囲繞していた巨大な構築物であり、庶民にとっても身近な歴史的構築物であったにもかかわらず、近代以降破壊が進み、いまではほとんど忘れ去られた歴史と化している。「御土居絵図」を手がかりに、その風化した京都の歴史を思い出し、地域の歴史への関心を喚起できるプロジェクトをめざして、個々の事業を企画・実施した。

まず、各事業の展開を補助する素材として、パンフレット、及び、「御土居絵図」デジタルコンテンツを制作した。パンフレットは、子ども博物館での活用を見込んで、大人用・子ども用の2種類を、2009年8月から9月にかけて制作・発行した。デジタルコンテンツは、同年8月に、御土居絵図を高精細スキャナーで撮像するとともに、デジタルコンテンツの内容について検討し、同年9月から制作に着手した。試行錯誤を繰り返し、完成したのは、2010年2月初旬であった。

上記の制作物を活かしたイベントを以下のとおり行った。

子ども博物館：2009年9月から2010年1月にかけて、毎週土曜日に開催される子ども博物館（学生・院生によるガイドプログラム）において、解説プロジェクトを実施した。全20回。2009年10月24日に外部評価を実施した。評価意見を踏まえ、改善策を検討し、指令書を渡して、展示物の中から探し物をみつけるという新たな方法を導入したところ、子どもが主体的に関わる領域が増え、内容が豊富化した。子ども博物館の来訪者に対して、パンフレットを適宜配布し、御土居についての理解を深めるための手がかりとした。

講演会：2009年10月と2010年2月に講演会を開催した。10月の講演会では、御土居の全体像把握のため、先駆的研究を行った研究者の講演、及び、コンテンツ制作のための調査の過程で明らかになった「御土居絵図」の制作主体に関する新知見を紹介する講演を行った。2月は、御土居がなぜ作られたのか、大局的な見地から再検討した講演、及び、コンテンツ制作のために調査した、江戸時代の御土居の実態についての講演を行った。2月の講演会では、完成したデジタルコンテンツを駆使し、コンテンツの紹介につとめた。

現地見学会：2010年1月に、北野天満宮と北野中学校に残る御土居を対象として、御土居の規模や構造を実地に調査する現地見学会を開催した。現地で御土居絵図を閲覧できるよう、高精細スキャナで撮像した御土居絵図のデジタル画像をIphoneに取り込み、活用した。

展覧会：2010年2月から3月にかけて、デジタルコンテンツのお披露目のため、展覧会を開催した。コンテンツとの比較ができるよう、「御土居絵図」7巻すべてを展覧するとともに、御土居の歴史に触れられるよう、考古遺物から江戸時代の絵地図を展示した。

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 5,728 人

内 訳：小学生以下 226人 大人 5,502人

2009年9月5日 週末子ども博物館解説プロジェクト 480人
～2010年1月30日 (全20回)

2009年10月24日 講演会 90人

2010年1月9日	現地見学会	30人
2010年2月6日	講演会	150人
2010年2月6日 ～3月14日	「いま、御土居がよみがえる」展	4,978人

(3) 事業により作成した印刷物等

- ・子供用パンフレット『京都の御土居』（2009年9月）
- ・大人用パンフレット『京都古地図案内』（2009年8月発行）
- ・『平成21年度文化庁美術館・博物館活動基盤整備支援事業報告書 京都「御土居絵図」がいざなう地域の身近な歴史探検』（2010年3月発行）
- ・デジタルコンテンツ：御土居ビューア（展示室にて公開、2010年2月完成）
- ・デジタルコンテンツ：3DCG（展示室にて公開、2010年2月完成）

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○ 新聞記事



京都新聞

平成22年1月31日 朝刊

同様の新聞記事：朝日新聞（関西版）	平成22年1月27日	朝刊	25面
中日新聞（関西版）	平成22年2月6日	朝刊	
京都新聞	平成22年2月7日	朝刊	
産経新聞	平成22年2月18日	朝刊	21面

○ テレビ、関連誌等

NHK「京都ニュース」

平成22年2月6日6時45分～6時50分（2分程度放映）

NHK「京都ニュース」

平成22年2月13日6時45分～6時50分（30秒程度放映）

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

「御土居絵図」デジタルコンテンツ：デジタル化したことにより、扱いにくかった「御土居絵図」の全体把握、細部の観察、異なる箇所と比較検討などが容易になった。展示の準備もコンテンツを利用しながら進めたところ、原本では気付かなかった新たな発見が多数あり、コンテンツを利用したことにより、展示解説は格段に豊かになった。とはいえ、コンテンツは操作が複雑で慣れるのに時間がかかるため、ほとんど使ってもらえないだろうというのが、公開前の予想であった。ところが展覧会初日から、パソコンの前に長く座り込む人が見られ、順番待ちが出たり、リピーターがあらわれたり、デジタルコンテンツの評価は想像以上に高かった。

一方、デジタルコンテンツの一部を携帯端末に搭載して館外活動の場で活用しようと試みた。しかし、容量が大きすぎて十分に機能しなかった。歴史をたずねて野外を歩く際のツールとして、現代の地図と過去の地図とを重ねて見られるようなコンテンツの需要は高いので、今後の課題として引き続き追求していきたい。

パンフレット：子ども博物館や展覧会において、来訪者に配布した。大人向け・子ども向けのいずれについても、御土居についてわかりやすく解説してあり、好評であった。大人向けは展覧会会期中に足りなくなり増刷した。

子ども博物館：子どもには難解な歴史地図を対象とした解説プロジェクトではあったが、途中、指令書を導入したことにより、子どもに対する解説の方法について、大きな示唆を得ることができた。指令書については、子どもたちを博物館展示へと誘う方法として、今後は館の展示全体に枠を広げて活用していきたい。

講演会：2日間全4回の講演により、御土居の築造から幕末まで、御土居が機能していた全時代を対象として、御土居を通時的に理解する機会を提供できた。デジタルコンテンツの制作のため、絵図そのもの、あるいは、各種の資料を調査・研究する中で、初めて解明しえた史実を紹介することができ、デジタルコンテンツの制作が、京都の歴史研究の進展に寄与する結果になった。ただ、江戸時代の御土居については、まだまだわからないことが多い。今後も史料調査を継続し、調査・研究の成果をデジタルコンテンツに反映する方向で方策を検討していきたい。

現地見学会：最新の機器を用いた現地見学会であり、好評であった。「御土居絵図」に距離が詳細に書き込まれているという特徴を踏まえ、見学会では御土居の測量も計画していたが、時間的な制約で実施に移すことができなかった。この現地見学会についても外部評価を導入したところ、半日の間に四つの内容を盛り込むというやや欲張った内容であったため、参加者の側が内容を消化しきれなかったのではないかと、という指摘を受けた。見学会を事業の末期に実施したため、指摘された問題点を事業期間中に咀嚼し改善する機会はなかったが、今後の館活動に活かしていきたい。

展覧会：展覧会に対するマスコミの関心は高く、会期の2週間ほど前から、新聞社の取材が相次ぎ、比較的大きくとりあげられた。NHKの地域ニュースでも報道され、入館者数の増加につながった。地域の歴史に対する関心の高さを改めて感じる展覧会となった。今回制作したデジタルコンテンツは、常設展示スペースに設置し、引き続き公開している。地域の歴史情報を提供するツールとしてコンテンツの活用をはかり、地域のニーズに応えていきたい。